

I 本研究の目的

1 本書のねらい

古器名の研究 古代の土器研究は、これまで当たり前のように考古学の領分であった。奈良時代のみやこである平城宮・京においても、出土した膨大な土器を分類整理し、編年表を逐次整備してきたのは、もちろん考古学者である。ところがその同時代史料である正倉院文書のなかに、じつに多くの土器の名前が見えていることは、一部の先行研究をのぞけば、これまであまり知られていない。

ここ平城宮・京では、これまでの発掘調査で膨大な量の土器が出土している。これは正倉院文書と同時代の食器が、現実の物体としていまでも遺存していることを意味する。考古資料としての土器と、史料に見えるその真の称呼とを結びつける研究を、本書では古器名研究と呼ぶが、あるいは「土器の名前の考古学」といってもよいであろう。平城宮・京というフィールドは、史料・考古の両面において、この種の研究がおこなえる稀有な環境なのである。

しかし古器名研究は、史料研究と考古学という、互いに異なる研究領域の狭間にあって、そのどちらからも等閑視されてきたといえる。本書でも詳しく述べるように、奈良文化財研究所における土器の考古学的分類（以下、奈文研分類）は考古学界に広く流布しているものの、古代食生活の復元には向かない。杯A・杯B・杯C・・・という考古学者の「言語」はよくできているが、それのみを用いていては想像のおよぶ範囲がかぎられてしまう。そして多くの考古学者は、目の前の膨大な土器が、古代の「片塊（かたもひ）」、「鏡形（かなまりがた）」、「片坏（かたつき）」、「片盤（かたさら）」や、「麦塊（むぎま）」、「羹坏（あつものつき）」、「塩坏（しおつき）」・・・の集合体であるとは、ついに気づかない。これはたいへん勿体ないことである。

いっぽう、正倉院文書所載土器の研究に正面から取り組んだ史料研究者は少ない。しかも彼らは、帳簿に見える土器の名前を網羅することはできても、それがどのような器物であったかは想像ができない。それは名前を当てるべきモノとしての土器をよく知らないからである。

要するに、土器の名前の研究は、史料・考古のいずれの領域でも隅に追いやられ、何とも不人気であるが、この2つをかけ合わせたらどうなるか。きっとおもしろい化学反応が起きるのではないだろうか。1300年も昔の土器に、その真の称呼を与えることができ、その用途も推定しやすくなるかもしれない—新たな知の創出は、もはや専門領域のなかだけでは不可能になりつつある。

2つの世界 古代の土器を研究したい若手の考古学者は、いちど『大日本古文書』全25巻を手に取ってみるとよい。そのページを繰ってゆくうちに、いくつもの土器の名前が目に飛び込んでくるであろう。そうして古代の現実を直視したとき、本当の世界はこちら側で、これまでの自分は考古学的な仮想現実のなかに居たにすぎない、と気づくであろう。その経験のあとで、自分の居場所をどちらの世界に求めるかは、その人の自由である。しかしもっとも望ましいのは、どちらの世界にも明るくなることであろう。これは2つの言語を操れる人と同じであって、土器をめぐるさまざまな事象を、それこそ複眼的に観ることができるからである。

したがって本書のねらいは、奈良時代の土器についての器名考証や、食器構成の復元作業を通じて、考古学者には古器名の世界を、史料の研究者には土器研究の世界を知ってもらうことである。若い考古学者に期待したいことは、すでに述べた。そこで若手の史料研究者に向けては、本書を通じて次のように伝えたい。すなわち、文字面としての土器を、ある一定の質量をそなえた、実体のあるモノとして想像できるようになってほしい、ということである。そのときには、「杯A、杯B、杯C・・・」の世界の住人である考古学者の知識と経験が必要になる。かくいう筆者もまた、その住人の一人である。本書には遺漏も多いかと思われるが、史料研究者が土器の世界に通じるガイドとなることを願いたい。

2 本書の構成

三部構成 本書は史料・考古の双方から、土器とその名前について考えることを目指している。したがって、本書には史料・考古の各章がある。そしてその両方の成果をふまえたうえで、奈良時代における食器構成の復元をおこなう。

本書Ⅱ章のテーマは、正倉院文書所載土器の研究である。そこでは奈良時代後半の東大寺写経所（または奉写一切経所）で実際に使用された食器を、年次ごと・写経事業ごとに整理し、可能であればその写経事業に従事した人員と食器とのかかわりや、食器が月ごとにどのように消費されたかについても検討をくわえる。この章でとりあげることになる土器の名前は、基本的に古器名である。本章で垣間見える世界は、疑いなく古代の現実につながっている。

本書Ⅲ章では、古代の土器の計量的研究をおこなう。ここではおもに、平城宮・京で出土した年代既知の土器群のそれぞれで土器を計測し、その統計にもとづいて食器構成の再現を逐次試みる。例えば平城宮土坑SK219の事例、次いで同SK820の事例・・・として、土器群ごとに古器名と実際の土器との対比を試みるのである。しかしこれらの出土土器は、すでに考古学的用語で分類記載されているので、それらと古器名との対応関係を整理する必要がある。そしてこの作業は、Ⅱ章でうかがえた古代の現実世界を、考古学的言語を用いて再構成することにほかならない。

本書Ⅳ章では、奈良時代における食器構成の復元を試みる。ここではⅢ章で逐一考えていた古器名考証の統一をはかり、東大寺写経所や奉写一切経所で実際に使用された食器構成を、平城宮・京出土土器を用いて再現する。そしてそのうえで、写経所における土器と食とのかかわりを探ることにしたい。

古器名と器種 ここまで記しただけでも、「古器名」という用語がいくつか出ているが、本書ではこれにくわえて「器種」、あるいは「考古学的器種」という用語が頻出する。その区別は読解に必要なので、ここで定義しておこう。まず古器名とは、史料に見えている土器の名前そのものである。本書ではその原文にならい、「塊」・「壺」などと土扁の漢字をあてる。その一方で器種とは、おもに考古学用語として通用している土器の記号的名称のことを指す。例えば「杯A I」・「杯B I」や「椀A I」、「皿A II」・・・などがそれである。こちらは慣例にしたがい、木扁の漢字をあてて古器名と区別する。しかしながら、扁平・浅形の食器は、古器名では「盤（さら）」、考古学的器種では「皿」となるが、両者の外延は必ずしも一致していない。また、大口径で深形の食器は、古代には「塊」と呼ばれたが、奈文研分類ではそのほとんどを「杯」というカテゴリに含めている。その結果、考古学者は実用器種としての塊と壺とのちがいについて、やや無頓着になっている。なお、古器名としての「塊」には、原文でいくつかの異なる表記（塊・院・椀）があるが、本書ではなるべく「塊」に統一した。